

山崎益吉教授定年退職記念号発刊に寄せて

高崎経済大学経済学会理事 岡田和彦

平成20年3月31日をもって、山崎益吉先生が本学を定年退職されます。

山崎先生は昭和17年7月、群馬県甘楽郡甘楽町でお生まれになり、群馬県立富岡高等学校、高崎経済大学を経て、昭和44年3月、青山学院大学大学院経済研究科修士課程を修了されました。そして、同44年4月、高崎経済大学経済学部助手として赴任されて以来、昭和47年から講師、昭和49年から助教授、昭和57年からは教授として日本経済思想史、経済思想史、経済学方法論などの講義を担当なさり、39年の永きにわたって本学の研究・教育に携わってこられました。この間、平成4～5年には経済学部経済学科長、平成6～7年には付属産業研究所所長、そして平成8年1月～11年1月には第19代学長として、本学の発展のために多大なるご尽力と深甚なるご貢献をなされてきました。

山崎先生の学術研究は社会思想と経済思想を中心に幅広い分野におよび、著述も実に多く公刊されています。それらの研究に通底する一貫したテーマは、人間はいかにあるべきか、人間はいかに生きるべきか、という根源的な問いに対する回答の模索です。その模索過程は、若き日に初期マルクスの唯物史観や自己疎外論について論じた「初期マルクス研究－唯物史観の成立過程－」（『高崎経済大学論集』1970年3月）、「初期マルクス研究－K.マルクスとL.フォイエルバッハ」（『高崎経済大学論集』1970年3月）などに始まります。そこからやがて、横井小楠、石田梅岩、二宮尊徳、三浦梅園、熊沢蕃山らの儒教とくに朱子学を論じた『横井小楠の社会経済思想』（多賀出版、1981年）、『日本経済思想史－日本の理想社会への道』（高文堂、1981年）へと進みました。さらに、平成3年4月からの文部省在外研究委員としてのロンドン大学での一年間の研究を経て、それまでの研究の成果をアダム・スミスの道徳哲学体系との関連において論じた『経済倫理学叙説』（日本経済評論社、1997年）から、『横井小楠と道徳哲学－総合大観の行方』（高文堂、2003年）へとという道程を辿ってこられました。

こうした多くの著述を通じて先生が追究されたのは、現代社会における「経済主義」の克服という課題です。その成果はさしあたり、先生の著書『転換期の経済と社会－現代社会の論理を超えて』（多賀出版、1981年）、そして『戦後

日本の経済思想—経済主義を超えて』（高文堂、2004年）、『経済と道徳』（花梨書房、2007年）に結実しました。そこでは、「天威」から解放された「人間本姓」が止めどもなくその「個」を主張し、その行き着いた先が「経済合理主義」としての「万事カネの世」という今日的状況であるが、こうした人間の限界は単に資本主義に関わるだけでなく、人間社会の根幹に関わる問題なのである、と論じられています。つまり、「経済主義」の克服の道は結局、有限の存在である「人間自体の解放」という困難な問題に遭遇せざるをえない、ということが示されています。

このように気宇壮大な学術研究を進めてこられた先生から、われわれは後学として実に多くのことをご教示していただきました。と同時に、先生の豊潤な個性と深い慈愛に抱擁されてきたわれわれは、先生の研究者そして人間としての偉大さをほんの少しなりとも分かち合うべく、今後もさらに精進するよう叱咤激励されていると感じないわけにはまいりません。このご恩は決して忘れません。

幸いなことに、先生は定年後も特任教授として本学でのご指導を続けてくださいます。今後とも、よろしくご教示ご鞭撻くださいますよう、心よりお願い申し上げます。

崇高なる熱き魂の持ち主は、野に降り立たれた後も、獅子奮迅のご活躍をなさることでしょう。

われらが山崎益吉先生に幸多からんことを、心底より祈念しつつ。